

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370133

研究課題名(和文) オーラルヒストリーによる1970年前後の前衛美術とその隣接領域に関する研究

研究課題名(英文) Studies on Avant-Garde Japanese Art and its Adjacent Fields circa 1970 through Oral History

研究代表者

加治屋 健司 (Kajiya, Kenji)

京都市立芸術大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：70453214

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：オーラルヒストリーの方法を用いて、1970年前後の日本における前衛美術とその隣接領域に関する研究を行った。合計25名の美術関係者(美術家、グラフィック・デザイナー、写真家、批評家、ギャラリスト、美術館職員、美術大学職員など)に46回の聞き取り調査を行った。戦後日本の前衛美術運動は、1970年前後に、デザインや科学などの隣接領域と深く関係しながら、進歩主義的な前衛の概念に終焉をもち、同時代性に特徴づけられる現代美術に移行し始めたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This research investigated avant-garde Japanese art and its adjacent fields around 1970 through oral history. It collected forty-six oral history interviews with twenty-five people including artists, graphic designers, photographers, critics, gallerists, museum staffs, and art university officers. It revealed that avant-garde art in postwar Japan was involved with its adjacent fields such as design and science around 1970, brought the progressive idea of avant-garde to an end and began to move towards contemporary art, which is characterized by contemporaneity.

研究分野：美術史

キーワード：美術史 美学 オーラル・ヒストリー 日本美術史 現代美術 前衛美術

1. 研究開始当初の背景

1970年前後の美術は、「前衛美術」から「現代美術」に転換する重要な時期にあるにもかかわらず、1960年代研究と1970年代研究の狭間にあり、両者をつなぐ動向として議論されることが少なかった。取り上げられる場合も、もの派と大阪万博を中心とする議論が多かった。近年、当時のパフォーマンスや集団制作、写真使用の美術等が注目を集めているが、いずれも各動向の分析が中心であり、動向間の交流はまだ十分に検討されていなかった。さらに、1970年前後の美術は、デザイン、写真、映像、音楽、建築等と関係しながら展開したが、その関係も十分に調査されているとは言えなかった。

これらの交流や関係は、各々の動向や領域に関する文献資料では十分に調査することができないため、オーラル・ヒストリー（口述史料およびその研究）の方法を用いて、活字化されていない声を集める必要がある。研究代表者は2006年に本研究の研究分担者や研究協力者等とともに日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブを設立し、美術関係者へのオーラル・ヒストリーの収集を行ってきた。2010年3月までに35名の聞き取り調査を合計54回実施した後、「オーラルヒストリーによる1960年代前衛美術研究の再構築」(科学研究費補助金基盤研究(C)、2010～2012)で、1960年代の前衛美術の関係者の聞き取り調査を集中的に行い、47名の聞き取り調査を合計90回実施した。

こうした聞き取り調査を踏まえて、2009年に国立国際美術館で、2010年に東京芸術大学でシンポジウムを開催し、2011年に大阪大学でワークショップを実施して、これまでの聞き取り調査の方法と研究成果に関して、専門家を招いて討議してきた。

過去3年間の聞き取り調査は1960年代の前衛美術を中心に行ってきたが、調査の過程で、1970年前後は隣接領域との関係が重要であることが判明したため、1970年前後の美術と隣接領域に焦点を当ててオーラル・ヒストリーを作成し、1960年代の前衛美術に関する研究成果を発展させようと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、オーラル・ヒストリーの手法を用いて、1970年前後の日本における前衛美術に関する研究を再構築することである。これまで1970年前後の前衛美術に関する研究は、もの派と大阪万博を中心に、主として美術作品や文献資料の調査に基づいて行われてきた。本研究は、デザイン、写真、映像、音楽、建築などの隣接領域も視野に入れながら、美術関係者への聞き取り調査を行うことによって、作品の制作過程やその背景、作家の生活環境等を含む、作家の活動全体を調査し、1970年前後の前衛美術を、

その隣接領域との関係を含めて、多角的・総合的に明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

まず、調査対象の当事者や関係者、彼らが関わった諸動向に関する文献調査を行い、まだ十分に語られていないことを重視しつつ、網羅的な質問項目を作成した。調査対象に詳しい専門家にも意見を聞いた場合もある。

質問項目をもとに、オーラル・ヒストリーの方法で聞き取り調査を行った。1970年前後の美術や隣接領域の当事者や関係者に対して、直接関係した美術の動向だけでなく、その人の人生や活動についても話を聞いた。オーラル・ヒストリーは、ある美術の動向だけでなく、それが生じた歴史的、地域的、思想的な文脈の一端を明らかにすることができる。そして複数の人々に対して聞き取り調査を行うことで、その文脈に対する理解をより正確で緻密なものにしていくことができる。

4. 研究成果

3年間で、1970年前後の前衛美術や隣接領域に関連した美術家、グラフィック・デザイナー、写真家、批評家、ギャラリスト、美術館職員、美術大学職員などに対して、合計25名、合計46回のインタビューを実施した。地方や海外での活動、デザインの動向、大学美術館の活動など、関連・隣接領域への美術の広がりについて調査を行った。

2013年度は、1960年代後半を中心に美術とその隣接領域で活動した美術家、グラフィック・デザイナー、批評家、ギャラリスト、美術館職員に対する聞き取り調査を行った。具体美術協会(後期)、フルクサス、ポップ・アート、九州派などの美術動向や、関西の美術全般に関わった美術関係者10名に対して、合計21回のインタビューを実施した。聞き取り調査の対象には、関西や福岡など地方を拠点に活動した美術家、ヨーロッパで活動した女性の美術家、ポップ・アートに関わったグラフィック・デザイナー、大学美術館の設立に関わった職員も含まれている。

2014年度は、1960年代後半から1970年初めまで、前衛美術の文脈で活動した美術家を中心に聞き取り調査を行った。具体美術協会第二世代として活躍した美術家、ハイレッド・センター、もの派として活動した美術家、ポップ・アートの動向に関わった美術家など9名に対して、合計10回のインタビューを実施した。

2015年度もまた、1960年代後半から1970年初めまで、前衛美術の文脈で活動した美術家を中心に聞き取り調査を行った。ゼロ次元、グループ位、北美文化協会の一員として活動した美術家、反芸術から出発しつつ環境芸術に関わった美術家、1960年代後半から1970年初めまで、年代

を中心に前衛運動を記録した写真家、マルチプルの制作に取り組んだ美術家、芸術・科学・技術の境界領域の研究者など、アジア美術の紹介に取り組んだ美術館学芸員など、11名に対して、15回のインタビューを実施した。

1970年前後の前衛美術は、種類において多様化しただけでなく、関連・隣接領域とも多様な関わり方をしたことを確認することができた。1960年代前半の前衛美術の動向を受けて、その後に本格的な活動を開始した美術家の聞き取り調査から、それまで美術団体を中心に展開していた前衛美術が、少人数のグループまたは個人の活動が中心となっていく過程、さらには、前衛美術の美術家がデザインなど隣接領域に展開していく経緯が分かった。そして、反芸術パフォーマンスを行った美術家や、地方で活動した美術家に加えて、その教えを受けた次世代の美術家にも話を聞くことで、前衛美術の運動の変化が明らかになった。前衛美術の運動が、物体中心の制作から身体表現へと変化した経緯、前衛美術の地方での展開、後にメディアアートとして知られることになる芸術・科学・技術の境界領域の動向、マルチプルの制作など前衛美術の多様化などが、具体的な事例の回顧を通じて明らかになった。

1970年前後に隣接領域と関わりながら展開した美術は、進歩と歴史の観念に支えられて時間軸を中心に展開する「前衛美術」を、空間的な広がりの中へと広げていった。それは、日本の前衛美術の活動が、欧米の現代美術の動向と関わりをもつ中で、日本における美術の制度や概念に対する問い直しを進めた結果である。反芸術パフォーマンスのような、美術館以外の空間へと広がる美術は、同時代の他の領域との関係をもたらし、美術団体中心の活動や物体中心の作品制作からの離脱は、作家がデザインや科学などに展開することを容易にした。そうした同時代の他の領域への展開が、時間軸を中心とする進歩主義的な前衛美術の概念に終焉をもたらし、同時代性に特徴づけられる「現代美術」への移行を促したことが明らかになった。

本研究によって、1970年前後の日本における前衛美術とその隣接領域に関する口述史料を作成することができた。すでに公開しているものもあるが、この口述史料はすべてウェブサイトで公開する予定であり、今後の戦後日本美術に関する研究の発展に大いに貢献するだろうと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

Kenji Kajiya, "Posthistorical Traditions in Art, Design, and Architecture in the 1950s Japan."

World Art 5, no. 1 (spring 2015), pp. 1-18. 査読有.

DOI: 10.1080/21500894.2015.1066419

加治屋健司「美術アーカイブのなかの美術史」『美術研究』第415号(2015年3月)、44-46頁. 査読無.

加治屋健司「紙の上の観光 『LIVING HIROSHIMA』と広島国際観光地化」『photographers' gallery press』第12号(2014年11月)、80-87頁. 査読無.

牧口千夏「フィクションに取り込まれた現実 マルセル・ブロータースの《セクション・シネマ》」『現代の眼』605(2014年4-5月)、2-5頁. 査読無.

池上裕子「世界的視野から問い直されるポップ」『美術手帖』1002(2014年4月)、80-85頁. 査読無.

[学会発表](計 17件)

Kenji Kajiya, "Socially Engaged but How? The Inflection of Social Awareness in Contemporary Japanese Art," Contemporary Japanese Art and the Social Turn, College Art Association, Washington, DC, USA, February 4, 2016.

Kenji Kajiya, "The Archive as Prosthetic Supplement," Archive Fever in Contemporary Art Institutions and Creative Practices, Archives & Research, Asia Culture Center, Gwangju, Korea, December 11, 2015.

Hiroko Ikegami, "Event' as a Global Format: Merce Cunningham Dance Company's World Strategies," Joint Workshop of Freie Universität

Berlin and Kobe University, 神戸大学 (兵庫県神戸市), 2015年11月22日.

中嶋泉「ニキ・ド・サンファルを日本で観る」 「ニキ・ド・サンファル」展, 国立新美術館 (東京都港区), 2015年9月19日.

中嶋泉「日本前衛美術受容の変遷」 「没後20年 具体の作家-正延正俊」展, 西宮市大谷記念美術館 (兵庫県西宮市), 2015年7月12日.

加治屋健司「カラーフィールド絵画の受容における大衆文化の意義」 第68回美術史学会全国大会, 岡山大学 (岡山県岡山市), 2015年5月22日.

Kenji Kajiya, “Refabricating Art History in Postwar Japan.” Dallas Museum of Art, Dallas, USA, March 26, 2015.

加治屋健司「原爆と観光 広島旅行案内書における木村伊兵衛の写真」 (森美術館 + テート・アジア太平洋リサーチセンター共催シンポジウム「トラウマとユートピア 戦後から現代におけるアジア美術の相互影響関係」, 虎ノ門ヒルズフォーラム (東京都港区), 2014年10月10日).

Hiroko Ikegami, “Tokyo Pop’s Second Wave: Yokoo Tadanori and Tanaami Keiichi,” presented in a symposium “For a New Wave to Come: Post-1945 Japanese Art History Now,” Japan Society, New York, USA, September 13, 2014.

Hiroko Ikegami, “‘The New York Connection’: Pontus Hultén’s Curatorial Agenda in the 1960s,” presented in a symposium “Art in Transfer: Curatorial Practices and Transnational

Strategies in the Era of Pop,” Moderna Museet, Stockholm, Sweden, November 8, 2014.

Kenji Kajiya, “Modernized Differently: Avant-Garde Calligraphy and Art in Postwar Japan,” M+ Matters: Postwar Abstraction in Japan, South Korea and Taiwan, Hong Kong Arts Centre, Hong Kong, China, June 28, 2014.

中嶋泉「福島秀子の絵画 戦後の人間像と抽象の方法」 第67回美術史学会全国大会, 早稲田大学 (東京都新宿区), 2014年5月18日.

池上裕子「アメリカのポップ、世界のポップ: アンディ・ウォーホルと田名網敬一を中心に」 アンディ・ウォーホル展連続レクチャー, 森美術館 (東京都港区), 2014年4月26日.

加治屋健司「マンガと美術が交差する言説 折り重なる時間と空間」 (「マンガ的視覚体験をめぐる フレーム、フィギュール、シュルレアリスム」第3回「マンガをめぐる言説、シュルレアリスムをめぐる言説」, 早稲田大学 (東京都新宿区), 2013年12月6日).

Kenji Kajiya, “Posthistorical Traditions: Strategies of Anachronism in Japanese Art between 1955 and 1978.” Negotiating histories: Traditions in Modern and Contemporary Asia-Pacific Art, Tate Modern, London, England, October 21, 2013.

Kenji Kajiya, “Intervening in Nature and Society: History of the ‘Art Project’ in Japan, 1955-2013.” Japan Foundation, London, England, October 17, 2013.

加治屋健司「美術アーカイブのなかの美術史」(研究会「アート・アーカイブの諸相」, 東京、東京文化財研究所(東京都台東区) 2014年2月25日)。

〔図書〕(計 14件)

藤田直哉、会田誠、加治屋健司、北田暁大、清水知子ほか『地域アート 美学/制度/日本』(堀之内出版、2016年) 95-133頁。

Darsie Alexander, Bartholomew Ryan, Hiroko Ikegami et al., *International Pop* (Minneapolis: Walker Art Center, 2015), pp. 165-180.

蜷川順子、アンシア・カレン、池上裕子ほか『油彩への衝動』(中央公論美術出版、2015年) pp. 283-304。

池上裕子『越境と覇権 ロバート・ラウシェンバーグと戦後アメリカ美術の世界的台頭』(三元社、2015年) 406頁。

弘中智子、粟津則雄、江川佳秀、中嶋泉ほか『井上長三郎・井上照子展 妻は空気・わたしは風 没後20年』(板橋区立美術館、2015年)、218-221頁。

松谷武判、ジェルマン・ヴィアット、中嶋泉『松谷武判の流れ』(西宮市、西宮市大谷記念美術館、2015年) 116-122頁。

Darsie Alexander, Bartholomew Ryan, Erica Battle, Claudia Calirman, David Feher, Ed Halter, Maria Jose Herrera, Hiroko Ikegami, Godfrey Leung, Luigia Lonardelli, Charlotte Cotton, Martin Harrison, and Toma Pospiszyl, *International Pop* (Minneapolis: Walker Art Center, 2015), 165-180.

Kawasaki Koichi, Namiko Kunimoto, Nakajima Izumi, Gabriel Ritter, and Sawayama

Ryo, *Between Action and the Unknown The Art of Kazuo Shiraga and Sadamasa Motonaga* (New Haven: Yale University Press, 2015), 16.

鈴木雅雄、伊藤剛、野田謙介、齊藤哲也、加治屋健司、中田健太郎『マンガを「見る」という体験』(水声社、2014年) 159-182頁。

Shigetoshi Osano, Tadashi Kobayashi, Jonathan Hay, Hiroko Ikegami and others, *Between East and West: Reproductions in Art* (Cracow, IRSA, 2014) pp. 349-361.

川谷承子、本阿弥清、加治屋健司『グループ『幻触』と石子順造』別冊、静岡県立美術館、2014年、112頁。

加治屋健司、粟田大輔、永峰美佳編『「見ることの神話」から アイディアの自立と芸術の変容』(中原佑介美術批評選集第4巻、現代企画室 + BankART出版、2013年) 323頁。

加治屋健司、粟田大輔、永峰美佳編『大発明物語 芸術と科学的思考』(中原佑介美術批評選集第9巻、現代企画室 + BankART出版、2013年) 301頁。

林洋子、粟田大輔ほか『近現代の芸術史 造形篇 アジア・アフリカと新しい潮流』(京都造形芸術大学・東北芸術工科大学出版局芸術学舎、2013年)、204頁。

〔産業財産権〕
○出願状況(計 0件)
なし

○取得状況(計 0件)
なし

〔その他〕
ホームページ等
日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ
<http://www.oralarthistory.org/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加治屋 健司 (KAJIYA, Kenji)
京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・准教授
研究者番号：70453214

(2) 研究分担者

池上 裕子 (IKEGAMI, Hiroko)
神戸大学・国際文化研究科・准教授
研究者番号：20507058

牧口 千夏 (MAKIGUCHI, Chinatsu)
国立近代美術館・学芸課・研究員
研究者番号：90443465

粟田 大輔 (AWATA, Daisuke)
日本大学・芸術学部・講師
研究者番号：60537421

中嶋 泉 (NAKAJIMA, Izumi)
広島市立大学・芸術学部・准教授
研究者番号：30737094

(3) 連携研究者

なし